

前回は、この世界の中で単独の〈私〉はどこにも存在せず、『いるのは、ただお互いを支え合っている〈私たち〉という存在だけ』であること。そして、男と女が『一体となる』とは、男女の〈性行為における一体性〉というだけではなく、同時に互いを「自分にふさわしい助け手」とする〈人格的な一体性〉を意味していることを書きました。性の交わりは、男と女の人格的な出会いの体現であると言えます。

さて、『わたしが・棄てた・女』のつづきをみていきましょう。ミツを襲ったハンセン病の疑い、彼女の人生はどんな展開を見せるのでしょうか。

## 『手の首のアザ』(二) その2 (p.167~175)

### 《絶望の中で》

ハンセン病という病気は、ミツにとって今まで考えたこともなかったものでした。そういう病気があるのは知っていました。子どもの頃、母親と川越大師に行ったとき、頭髪が抜け、指のない人を見かけました。そのとき母親に「悪いことばかりしていると、あんな人間になってしまうよ」というようなことを言われたのです。母親のその言葉はずっとミツの記憶に残っていました。

『自分がどんな悪いことをしたというのだろう。(中略) 新しい母ちゃんが来た時、自分が家にいるといけないと思ったから、東京に出てきた。工場でだって… 一生懸命に働いたと思う。ヨッチちゃんがさぼっている時だって、自分は包装をやり続けた。そのどれが悪いことだったのだろう』と考えるミツでした。

ミツの母親は仏教でいう因果応報的なことを言ったのでした。またミツは、自分の家にはそんな病気にかかった人はいないし、父親は元気だし、母親は別の病気で亡くなったし… と、けんめいに遺伝による感染を否定しようとします。当時ハンセン病は遺伝性もあると誤解されていたということは前回お話ししました。

ミツは東京にもどり、新宿で昔いっしょに働いた見覚えのある女性を見かけました。三浦マリ子です。もちろんミツは、彼女が吉岡と結婚の約束をしたとは知りません。ミツは『傘で自分の顔と身体を本能的にかくして』しまいます。『今日は誰にも声をかけられるのがひどく辛かった』からです。ミツは、マリ子の明るいであろう将来を想像して、『(嫌いだ。三浦さんなんか大嫌いだ。)]』と、こころの中でつぶやき、『はじめて森田ミツは他人の倖せを憎むという、暗い衝動を感じた。この新宿のすべての人たちが、自分と同じように不幸になればいい。腕をくんで、むつまじそうに歩いている恋人たちが自分のように泣くこともできず、この町を歩きまわるとよい。自分だけがなぜこんなに辛く、不幸でなければならないのか』とってしまうのでした。

また、街頭で救世軍(キリスト教・プロテスタントの一つの派。軍隊組織を特徴とし、大衆伝道と社会事業を重んじる。)のおじいさんの背後の壁に貼られた《あなたたち誰でもを愛している神》という文字を見ても、うつろで意味のないものとしか映りませんでした。

## 《「なぜ、私が…」、「私だけが…」》

ひとは思いもよらぬ重い病気や、一生背負っていかねばならないケガに見舞われたり、地震などの災害に襲われると、「なんでオレが」、「どうして私だけが」と考えてしまいます。

当時ハンセン病は治らない病であり、患者は人里離れた場所に隔離されてしまったのです。ミツは「自分もその一人になってしまった … 」という絶望と、「なぜ私が … 」という不公平さ・理不尽さで心の中が引き裂かれたのでした。

それまで工場で一生懸命働き、休みの日は町へ出て映画を楽しみ、やっと吉岡さんという大学生と知り合いになれた … ささやかではあったけれど、彼女にとってやっと巡ってきた明るい日々を、ハンセン病が今まさにぶち壊そうとしている — 。人生で初めてひとの幸せに嫉妬し、健康なひとの不幸を願う自分を感じたのです。もし、あなたがミツの立場に立ったとすれば、やはり同じような感情を抱くのではないのでしょうか。

『もし神というものが本当に存在するならば、なぜ意味もなくあたしのような女の子を不幸にするのだろう』、『…、人生とよぶ路の中で、自分が全くひとりぼっちであり、ひとりぼっちであるだけでなく、病んだ犬よりもっとみじめで見棄てられていることを彼女ははっきりと知った。地下道の壁にもたれ、彼女は人びとがふしぎそうに振りむくのもかまわず泣いた。ミツは本当に辛かった。辛かった ……』。

この〈苦しみの意味〉について、その後のミツの人生を追う中で考えていきましょう。

## 『手の首のアザ』（三）(p.176~195)

### 《御殿場・復活病院へ》

ミツは復活院療養所で精密検査を受けるために、いやいや御殿場へ向かいます。世間から隔絶された『地の果のような気』がする場所へ。汽車の窓から、眼の前を流れてゆく街を見て、『この東京に戻ってくることはない』だろうと思いながら …。

そして、霧雨が降る御殿場に着きます。駅の待合室には富士登山をする若者たちが歌を歌いながらバスを待っていました。その歌『トロイカ』は、吉岡と行った渋谷の酒場でみんなが合唱していた曲でした。ミツは小さな流れをつくって雨水が流れている神山という停留所で降りました。走り出したバスの窓からは、若者たちの楽しそうな歌声と笑い声が聞こえ、やがてそれは小さくなり、消えていきました …。

### 「サイナラ、吉岡さん」

『なにもかもが …… 終わったのだという絶望がミツを打ちのめした。自分は今一人ぼっちだ。一人ぼっちとは誰とも会えぬことではなかった。(中略) 一人ぼっちとは過去の楽しかった思い出とさえ別れをつけることだった』、『サイナラ、吉岡さん』と、つぶやきながらミツは「復活病院入口」と書かれた立て札を見つめました。

『帰ろうね。ね。帰ろうよ』… そんな声が耳もとでささやきます。ミツは赤黒いアザを見つめながら、『たった、これだけのことじゃないか。かくしておけば誰にだって迷惑をかけるものではなかった』と、東京に帰りたい気持ちがこころを占領しました。そのとき、白い修道服を着た外国人の女性が声をかけました。『心配、いらぬですよ。心配、

なにも、なにも、いらぬですよ』。ミツは修道女に促され、やっとのことで病院内に入ったのでした。

### 《苦しみの意味》 — その1 —

「もし神というものが存在し、世界を創ったとすれば、どうしてこんなにたくさんの哀しいこと、苦しいことが多いのか？」という疑問は、誰もが一度は抱いたことがあるのではないのでしょうか。

私たちが今、こうしている間にも食べるものがなく、予防接種も受けられず命を落とす子どもたちは、2～3秒にひとりと言われます。世界各地で宗教的・民族的な対立・抗争で争いを繰り返している国・地域が数多くあり、多くの人たちが毎日命の危機にさらされています。新自由主義の政治・経済がグローバル化され、豊かな者はさらに豊かに、貧しい者はさらに貧しく… という状況も見られます。そしてその荒波は、経済だけではなく教育や医療、そして福祉などの〈いのち〉にかかわる分野までも侵しつつあります。そのような状況の中では「貧しさ」や「弱さ」は「自己責任」というひとりで排除され、少なからぬ人々は自らの存在意義を不安と恐れをもって模索していると言えるでしょう。

「なぜ自分がこんなに苦しまなければならないのか」、「どうして次から次へと苦しいことがおこるのか」… ミツと同じような疑問がこころの奥底からわきあがってきます。この問いは、人間が誕生して以来ずっといできてきた回答がなかなか得られない問題だと思います。

しかし、これまでみてきたように『聖書』の『創世記』では、天地を創造した神は『**すべてのものを御覧になった。それは極めて良かった。**』(1章31節)とされたのでした。『**良しとされた**』という言葉は1章の中で何度も繰り返されています。

この部分を、第9回でもご紹介した森一弘師は次のように書いておられます。

『創世記』の第1章がバビロン捕囚(第12回参照)後に書かれたものであり、捕囚期にイスラエルは侵略され、国土は踏みにじられ、多くの人々が殺され、生き残った人々は奴隷として連行された体験をしたことを述べた後、『**天地創造の物語をまとめた人々は、悪が世界を覆い、運命を呪いたくなるような状況の中で人々が苦しんでいることを目の当たりにしながら、神が造られたものはすべて良かったと表現したのです。**(中略) **その背景には、悪の問題は神の問題ではなく、人間の問題であるという視点があ**』るといいます。また、『**聖書が人間の苦しみと悪の問題を、人間の自由と責任という観点からとらえようとしている**』と続けています。

その後の第2章ではアダムとエバの創造物語、第3章はアダムとエバの罪、第4章は兄カインの弟アベル殺し、第6章では洪水前の人間の墮落の物語…と続きます。そこでは人間の罪の問題が取り上げられ、『**人間のエゴイズムと欲望が、この世界を悲惨なものにしていくプロセスを明らかにしようとしている**』のであり、『**神が造られたこの世界の秩序と調和を破壊するのは人間のエゴイズム、欲望にほかならない、という明確な世界観・人間観が働いてい**』るといいます。

人間には神から〈自由意志〉が与えられています。自ら考え、判断し、自主的に決断

する〈自由〉は人間性を高める可能性と同時に、人間を滅びに導く可能性もあるのです。

この問題については、今後も考えていきます。では、また。

【引用した書籍】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』

・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』 ・森 一弘 『キリスト教入門 Q & A』